



流霞



論語

関其寧書 二字書「流霞」

6月は緑が濃くなつて徐々に暑さに向かい、水辺の恋しくなつてくる季節です。今回ご紹介する二字書「流霞」は、風にたなびいて動く霞を表した言葉で、漢詩にも用いられる熟語です。のびやかで緩急自在の筆運びを間近で見ていると心なしか一陣の風が吹いてくるようです。

この書には、「関其寧」と署名があります。落款は「南楼」(朱文)と「関其寧印」(白文)が捺されています。

以前の「未来への伝承」44号(平成18年6月1日発行)で土浦藩士関其恭の書をご紹介します。其寧は思恭の養子となつて関家を継いだ人物です。

其寧は享保18(1733)年、浜名家の次男として生まれました。卓越した筆力を持ち、すでに十数才にして書をよくし、故事成語に通じていたと墓誌には書かれています。

540部もある中国最古の字書「説文解字」という書物の内容を問われると、すべて間違いないく答えるほどの博覧強記ぶりに、師であつた関思恭も驚いたと伝えられています。その才能を認められ、思恭の養子となり関其寧と名のりました。字を子永、号を南楼といい、義父思恭の跡を継いで義父同様儒者として20人扶持をもらい、4代藩主土屋篤直(1733~1776年)に仕えました。

其寧は古詩、近体詩に優れ、篆・隸・楷・行・草のあらゆる書体を自在に書き分けたといわれています。其寧の書いた「論語」を見てみましょう。

「子曰、学而時習之、不亦説乎。有朋自远方来、不亦楽乎。人不知而不愠、不亦君子乎。(子曰はく、学んで時に之を習ふ。亦説ばしからずや。朋あり遠方より来る、亦楽しからずや。人知らず、而して愠らず、亦君子ならずや)。よく知られた一節が、流麗な草書で書き始められています。草書の手本として書いた作品であると思われまます。

其寧には『群卉龜鑑』、『篆書唐詩七絶』などの著書があります。寛政12(1800)年、68歳で没し、父思恭と同じ小日向(東京都文京区)の称名寺に葬られました。

二字書「流霞」には、私たちの街が面し、先祖の歴史に大きく影響を与えてきた霞ヶ浦の、「霞」という文字が含まれています。来る7月1日でリニューアルしてちょうど1年を迎える市立博物館では、其寧の書いた「霞」をいくつかの印刷物に用いています。現在に生きる其寧の文字を館内で探してみてください。

この資料は、7月6日(日)まで市立博物館1階の展示室2でご覧になれます。

市立博物館 ☎824・2928

